

今焼茶碗

利休居士が世に出した茶碗(長次郎茶碗)は、当初「樂茶碗」という名前すらなく、「聚樂焼茶碗」や、今新たに生まれた茶碗として「今焼茶碗」などと呼ばれていました。

今でこそ伝統と呼ばれていますが、はじめは、真つ白。前衛的な茶碗でした。

この度の新たな茶碗にも、〇〇茶碗という名前がまだありません。

「赤樂茶碗」「黒樂茶碗」という在り方も大切にしつつ、その固定観念をブレイクスルーし、改めて茶碗の持つ存在の魅力、そこから「茶」を通し茶の湯の魅力を感じて欲しいと、新たに生み出した茶碗です。

父である十五代は、焼貫茶碗という新たな樂茶碗の在り方を世に問いました。

その目線は、父だけでなく、歴代が皆、茶の湯の茶碗として長次郎茶碗の精神性を軸に据え、挑戦し続けた樂家「樂茶碗」の燈(ともしび)とも言えます。

この度の茶碗は、自然の光が舞い込む茶室の中に佇む茶碗として生み出した茶碗です。

華美な景色はありません。

ただ存在する。

時折、茶室の中に光が舞い込み、茶碗から僅かに言葉(表情)が放たれる。

そのような茶碗です。

黒茶碗と同じ時に同じ窯で生まれた兄弟のような茶碗。土は奈良・国宝薬師寺東塔基壇の土。

土が炎を纏い景色を生み、柔らかく手でカタチ造りました。

畳の上、また手の中でその存在を感じて頂ければと思います。